

月満御前御書

文永八年五月八日 五〇歳

若童わらわべ生まれさせ給ひし由承り候。目出たく覚へ候。殊ことに今日は八日にて候。彼と云ひ、此と云ひ、所願潮しをの指すが如く、春の野に華の開けるが如し。然ればいそぎいそぎ名をつけ奉る、月満つきまる御前と申すべし。

其上此の国の主あるじ八幡大菩薩は卯月八日にうまれさせ給ふ。娑婆世界の教主釈尊も又卯月八日に御誕生なりき。今の童女、又月は替はれども八日にうまれ給ふ。釈尊・八幡のうまれ替はりとや申さん。

日蓮は凡夫なれば能くは知らず。是しかしなが併まいら日蓮が符を進らせし故なり。さこそ父母も悦び給ふらん。殊に御祝として餅もちい・酒ちようもく・鳥目一貫文送り給ひ候ひ畢おわんぬ。是また御本尊・十羅刹に申し上げて候。

今日の仏生まれさせまします時に三十二の不思議あり。此の事、「周書異記」と云ふ文記にしるし置けり。

釈迦仏は誕生し給ひて七歩し、口を自ら開きて「天上天下唯我独尊、三界皆苦我当度之」の十六字を唱へ給ふ。今の月満御前はうまれ給ふて、うぶ産ご声糸なに南無妙法蓮華経と唱へ給ふか。法華経に云はく「諸法実相」と。天台の云はく「声仏事を為す」等云云。日蓮又かくの如く推し奉る。譬へば雷の音、耳豊しいの為に聞く事なく、日月の光、目くらの為に見る事なし。定んで十羅刹女は寄り合ひて、うぶ産水をなで養ひ給ふらん。あらめでたやあらめでたや。御悦び推し量り申し候。念頃ねんごろに十羅刹女・天照太神等にも申して候。あまりの事に候間くわ委しくは申さず。是より重ねて申すべく候。穴賢あなかしこ穴賢。

日蓮花押

月満御前え